ミクロネシア事業ゴール直前！

2018年度から取り組んできた、ミクロネシアの離島の女性たちと繋がるJICA草の根技術協力事業が、ようやく最終局面に入ってきました。12月と1月には日本と現地を繋いでのオンライン講習会が催され、6名の参加者がソーラーシステム管理の技術を4日間に亘って学びました。講習会の後には、実際に離島でシステムを設置することにもチャレンジ。コロナ禍の中で難しいと言われていた技術移転を何とか達成することが出来ました。

2月９日には、現地と日本を繋いでのオンライン報告会が計画されています。参加希望される方は事務局までお尋ねください。

おさがりバザー会場で フード＆クロージングバンクをPR

昨年末の12月11・12日、土・日の2日間、子育て世帯をターゲットにした子供服限定の「おさがりバザー」と「フード＆クロージングバンク回収」のイベントを小名浜港にある「いわき・ら・ら・ミュウ」の遊覧船発着ロビーで開催しました。

子供服の古着を有効活用してもらうチャリティバザーを開催する事で、ピープルの古着リサイクルについて知ってもらう。さらに、SDGs取組みである食品と衣類の回収を同時に実施する事でフード&クロージングバンク事業も知ってもらうと言うダブル効果を見越したイベントでした。

▲衣類回収のボックス

▲賑わいを見せるバザー会場

開催当時、世間では2回目のワクチン接種が済み、感染者も連日減りつつあって、来場者の数が多く見られました。

またフードバンク（食料品）・クロージングバンク（衣類品）とも集まりが良く、この活動が少しずつ周知されている事を実感する事が出来ました。

マスク着用、消毒の呼びかけ等、感染対策に注意しながら無事に開催する事が出来た今回のイベント。このままコロナが無くなる事を願いたいばかりです。

●回収された衣類の総重量　220kg
**　回収された食品の総重量　58.3kg**
●来客数　1日目：173名/2日目：127名（2日間合計：300名）

3月21日にフード＆クロージングバンクPRイベント開催決定!!

昨年度、一社）日本リ・ファッション協会と共同主催したフード＆クロージングバンクPRイベントが、今年も帰ってきます。今年のテーマは、「『足りない×余ってる』を分かち合いで解決！フード＆クロージングバンクのある優しいまちづくり！」。昨年度好評だったリファッションキャラバンのステージに加えて、今回はSDGsカードゲームの体験を通してみんなで「衣」や「食」の在り方を考えます。

開催日時：3月21日（月・祝）10:00～16:00
会　　場：いわき駅前ラトブ6F
**　　産業創造館企画展示ホール他**

この事業はセブンイレブン記念財団助成事業として実施されます。是非、今からご予定ください。

※コロナ禍の状況により予定が変更になる場合もございますのでご理解の程お願いします。

ウェディングベイブ人気

数年、本会としてはオーガニックコットンの販売が激減してしまいました。コットンベイブ制作が間に合わないほど忙しかった頃が嘘のような日々が続いていました。

ところが昨年10月埼玉県の大淵久美恵さんから、ウェディングベイブ100個をお願いしたいとの連絡が入ったのです。一度には大変でしょうから毎月10個づつ送って下さって結構ですとのこと。

昨年の3月大淵さん自身勤務していた保育所を退職。その時全職員に記念品にするので30個をお願いしたいとの申出がありました。それが最初でした。次には近々結婚する息子の招待客の引き出物にしたい。次には結婚を勧めたい若者達へ。コロナ禍で闘っているナースの友人達へ。社会派正義の知人弁護士へ…。

「今後ともコットンベイブで東北大震災の応援をしていきます。私の友好活動の旗がしらですので宜しく応援してくださいね」と、逆に私達が励まされています。どこまでも広がる大淵さんの真心と優しさに感謝、感謝です。

女の子は全身を白綿で。白レースのベールを被り胸にはバラの花を身につけた花嫁姿。

男の子は全身を茶綿で。襟元の蝶ネクタイが凛々しい花婿姿。この二人が仲良く並ぶ姿は何とも微笑ましく、大淵さんは「平和の天使」と呼んで下さっています。

▲愛らしい姿のウェディングベイブ

私たちの活動を会員として支えて下さい。会費納入をよろしくお願い致します。

活動会費（実際に活動に参加される方と、会報購読という形で支援して下さる方）　2,000円／年
賛助会員（資金的な面から支えて下さる方と法人・団体会員）　10,000円／年

郵便振替（02110-0-24908）でお送り下さい。

つぶやき

バブル時代、送り迎えをしてくれる男性を称して「アッシー君」という呼び方が生まれた。よく名付けたものだと感心する。経済的にどんなに裕福でも、車の免許を返納した高齢者、特に歩行困難を伴ったりする場合、100メートル先のコンビニに行くことさえ難しい。タクシーを呼ぶ事もためらわれ、不便な日々を送っている高齢者は結構多い。こんな時さっと車を出してくれる存在、いわゆるアッシー君が身近にいたらどれほど有り難い事だろう▼震災数年前に土木会社を畳まれ悠々自適の生活を送られていて、今は90歳を優に越えられた佐藤さんご夫妻。実は東日本大震災の折りピープルでは災害ボランンティアセンターとなる事務所兼倉庫を探していた。「オレの事務所を使えや」と鉄骨2階建ての倉庫と敷地100坪を快く貸してくださった。当時全国からボランティアが駆けつけ多い日には180名、普段でも100名近いボランティアが海岸線の清掃や津波被災家屋の片づけなど人海戦術で進めてくれた。一方古着や瀬戸物、靴など支援品が山のように毎日届いた。受付と仕分けと整理、配付先の選定など目の回るような忙しさ。それもこれもあの建物と広場の提供があってこそ可能な作業だった▼当時事務局長として指揮を執っていた私にとって佐藤さんのご恩は生涯忘れることが出来ない。ご自宅が事務局のすぐ近くということもあり、震災後11年経った今も交流をさせていただいている。現在ヘルパーさんの助けを受け元気に生活されている。「この歳になると食べることが唯一の楽しみ」と言いながら月数回は近くのスーパーでの食品の買物を望んでおられる。その時がアッシー君の出番。回りから「良くやるネ～」と言われるけれど、私自身免許証返納の時期が迫って来てるだけに、自分の将来と重なりその頃アッシー君はいるのかしらと考えてしまう。それにしても回りにアッシー君候補が一杯居る社会だったら高齢者にとってどれほど過ごしやすいだろうかと呟いてしまう私である。（甘）